

生命と進化をめぐる科学と宗教

横山輝雄*

1. 21世紀における「科学と宗教」問題

科学と宗教の関係について、かつては17世紀の近代科学の誕生期以来、一貫して「科学と宗教の闘争」があったとして、ガリレオ裁判やデカルトの『世界論』刊行中止問題などがその例とされたりした。しかし、しばらく前からそうした解釈には疑問が呈されるようになり、18世紀の啓蒙期までとそれ以降を区別し、たとえばニュートン的な自然神学の時代は、「科学と宗教の闘争」というよりは、キリスト教世界観の新たな再編成といった性格のものであることが明らかになっている。

しかし、そのことから「科学と宗教の闘争」がまったくの誤解であったといった結論を出すとするれば、それは逆の行き過ぎである。19世紀には実際に「科学と宗教の闘争」が存在した。もちろんこの事実を過大に評価すべきでないことは確かである。たとえばイギリスでは19世紀になっても自然神学の伝統は強い力をもっていた。そうではあるが、「科学と宗

* 南山大学人文学部教授

教の闘争」が実際にあったことが、20世紀における科学と宗教の関係を考える枠組みを形成するのに大きな影響を与えた。これには、イギリスにおける改革派のイデオロギー、フランスにおける共和派のカトリック批判、ドイツやロシアにける社会主義などの背景があった。

20世紀には科学者も宗教者もその多くは、科学と宗教の「分離と相互不干渉」の立場をとるようになった。つまり、科学と宗教はそれぞれの領域が違うのであり、それを混同しないようにするべきだ、というわけである。「闘争史」であげられていた事例はそれを無視した逸脱事例とされ、宗教の側が宇宙の構造や生命の歴史などについての世界像に介入するべきではなく、それは科学者の探求に委ねるべきだということになった。

しかし、1970年代以降、生命や環境の問題が重視されるようになってくると状況が変わってきた。それは最初具体的な現実問題から提起されたが、それに技術的に対処するだけでなく、それを根本から考えようとする、倫理や価値に問題が問われるようになってきた。生命操作をめぐる倫理委員会の設置などがその例である。しかし、そうした議論において、さらにその基礎にある世界観が問題となってきた。自然災害、障害と福祉、「エンハンスメント」などの問題では、自然あるいは世界をどう見るかということが、価値や倫理の問題と結びついている。18世紀にリスボンの地震をめぐる、それが神の譴責なのかどうかをめぐる論争があったが、それと同様の問題である。

2. 近年の動向

1996年にローマ法王の進化論についての書簡が出され、また同じ頃アメリカの哲学者デネットの大著『ダーウィンの危険な思想』も出版された。ダーウィンの『種の起源』が出版されたのが1859年であり、それから一世紀以上たっている20世紀の末になって改めてダーウィンや進化論に関

心がもたれるようになったのは、20世紀が主に、先にみた科学と宗教の関係における「分離と相互不干渉」の時代であり、あまり議論がなされなかったためであるが、それに加えて自然科学と人文社会科学の「分離と相互不干渉」もあったためである。19世紀末のスペンサーの社会進化論のように、自然科学とくに生物学の議論を人文社会科学に拡張することに警戒的になったのは、優生学の問題などがあったためである。ウィルソンをはじめとする社会生物学が1970年代に新たな形での知の統合の問題を提起し、そうしたこともあって20世紀の末に進化論への関心が高まってきた。20世紀の「分離と相互不干渉」で先送りされていた、19世紀にハクスレーが『進化と倫理』で問題にしたような事柄が再び問題になってきた。

しかし、21世紀に入ると問題の次元に変化が生じた。それは宗教の問題が前面にでてきたことである。1970年代以降の社会生物学をめぐる論争では、主として生物学と人文社会科学の関係をめぐって議論が行われたが、宗教の問題はあまりとりあげられていなかった。利己的遺伝子のドーキンスが批判していたのは、「ダーウィンなどいなかったかのように」している哲学者などの人文系学者である。ところが、21世紀にはいると、ドーキンスは宗教を正面から批判するようになった。ドーキンスが宗教に懐疑的ないし批判的であろうことは以前から予想されたが、それを公然と表明したわけではなかった。彼にも「分離と相互不干渉」的な意識があったのかもしれない。しかし、『神は妄想である』などの最近の著書では、以前と違ってはっきりと宗教批判を展開するようになった。

同様なことは、進化生物学者で進化論についてさまざまな議論を展開していたグールドについてもいえる。彼はその晩年に科学と宗教について主題的に論じた著書『神と科学は共存できるのか』を残している。もっとも、グールドの立場は「分離と相互不干渉」に近く、この点ではドーキンスと見解を異にしており、実際ドーキンスはグールド批判をおこなっている。神学者で科学と宗教について以前から論じていたマックグラスは、こうし

た状況のなかでドーキンスの最近の見解を批判する著書を複数刊行している。日本ではドーキンスやグールドは多くの訳書が刊行されているが、こうした問題は必ずしもよく理解されているわけではない。また二人が一般によく知られているのにたいして、マックグラスは一部の人を除いてその知名度は低い。ドーキンス批判の著書の翻訳などが刊行されることが期待される。

3. 日本における状況

ドーキンスやグールドの最近の著作があまり理解されないのは、日本において科学をめぐる世界観問題への自覚が欠如していることによる。明治期以降日本は西洋の科学を受容したが、それは産業や技術との関連においてであった。19世紀の後半は欧米においても、すでに自然神学的な知の統合の時代は終わっており、「科学の制度化」が進行し、技術や産業と科学が結びついた時期であり、ちょうどよかったのかもしれない。かりに鎖国せずニュートン時代の「科学」を受容しようとしたらそうはいかなかったであろう。当時の「科学」は自然神学であり、キリスト教の理解なくしては、「科学」も理解できなかったであろう。

しかし、明治以降100年以上たち、また現在の「グローバリズム」で国際交流が活発になると、日本でも生活様式や文化において欧米と共通のスタイルが広がってきている。アカデミズムの哲学研究者などではアメリカ的な思考も受け入れられている。例えば、自然主義（唯物論）や功利主義が公然と語られるようになってきている。それは、先進国における科学技術をめぐる問題の共通性に由来するものである。先端医療技術や遺伝子組み換え作物に対してどのような対応をとるかは、どの国においても問われているし、地球温暖化などには世界全体での対応が求められているからである。

そうした状況のなかで、科学技術の暴走に対する警戒意識もひろがってきており、場合によっては政治的な問題も生じている。欧米では科学技術の推進に対する対抗思想は、キリスト教つまり超越神論であるが、日本での対抗思想は、伝統的なアニミズムや「共生」思想、つまり内在神論的である点が欧米と違っている。こうした問題を今後検討する必要があるだろう。

4. 「知の統合」における日本のキリスト教の役割

日本に近代科学が導入された明治以降、仏教などの日本の伝統宗教は科学との対決をさせてきた。それどころか、「キリスト教は科学と対立するが、仏教はそうではない」といった考えさえあり、仏教はそもそも科学と矛盾しない、あるいは関係がない、というのが一般的である。さすがに生命倫理などでは仏教の立場からの議論はあるが、宇宙論や世界観の問題はほとんどとりあげられていない。あるいはそれを議論する概念的道具立がないのかもしれない。そのため現在のさまざまな世界観の問題に十分にとりくんでいないように思われる。

日本においてキリスト教は、信者の数は少ないが知的には大きな影響を与えている。自身は信者ではないが、『聖書』やキリスト教に関心のある人は少なくない。これは中国などとも共通することであるが、そうした「文化キリスト教」は広く受け入れられている。例えば死者が「天国」に行くといった発想は、キリスト教と自覚されないまま一般にひろがっている。また人文社会科学の場合、その多くが欧米の議論によっているため、キリスト教的な問題意識が知らず知らずのうちに入ってきている。例えば環境問題と「自然の支配」の思想、あるいは「人間中心主義」と「人間非中心主義」といった議論が、キリスト教の枠を超えて議論されている。

こうした状況のなかで、キリスト教の日本化の問題を検討することが有意義であろう。内村鑑三、田中正造などの自然観が現在注目されているが、

彼らのキリスト教理解は欧米の主流のキリスト教解釈とは異なるものをもっている。とりわけ明治期は、仏教や儒教などの伝統思想からキリスト教へ改宗した場合が少なくなく、現在でいう「宗教間対話」とつながるような問題がそこにはあった。キリスト教がある程度定着すると、そうしたことは過渡期の不十分な理解とされることにもなったが、現在別の視点から見直すことも必要であろう。

以前から「宗教間対話」として、キリスト教と他宗教との対話が行われてきた。日本において「科学と宗教」の問題を議論する場合、直接に「科学と仏教」といった形で議論しても手がかりとなる概念などが乏しく、あまり進展しないように思われるが、近代科学との関係を歴史的にさまざまな形でもってきたキリスト教との比較という形で、宗教間対話を科学と宗教の問題と関係させることが必要ではないだろうか。